九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

みんなのうた《大きな古時計》（1962年）映像再現の試みについて

富澤，瑞夫
トート音楽院 ： 講師 ： 映像研究

佐藤，慶治
鹿児島女子短期大学児童教育学科 ： 専任講師・音楽教育学専攻

https://doi.org/10.15017/4740658

出版情報：総合文化学論輯. 14, pp.23-38, 2021-05-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies
バージョン：
権利関係：Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この 論輯 の全ての文章・画像の権利は、 総合 文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。

研究ノート：

みんなのうた《大きな古時計》（1962 年）映像再現の試みについて

富澤　瑞夫、佐藤　慶治

はじめに(佐藤執筆)

戦後の日本音楽文化において、重要な番組の一つとして位置づけられる NHK「みんなのうた」(1961-)であるが、最初期にあたる 1960 年代から 70 年代にかけての放送映像は、その多くが失われてしまっている。これは当時、放送用のマスターテープが大変高価なものであったため、次の番組を制作する際に、上書きして使用されてしまったという事情があった。そのようなこともあり、NHK「みんなのうた」は 50 周年にあたる 2011 年より「発掘プロジェクト」、すなわち視聴者が 8 ミリテープ等で保存していた当時の番組映像や、もしくは音声を発掘するというプロジェクトを開始した。

「みんなのうた」HP の楽曲一覧のページ(https://www.nhk.or.jp/minna/request/1960/)を見てみると、映像が失われている 1960 年代の楽曲のうち、半分以上の楽曲において、音声が見つかっていることがわかる。これは現在まで続く「発掘プロジェクト」の大きな成果と言えるだろう。しかし音声が見つかっている楽曲についても、映像に関しては発掘されていないものが多くあり、1960 年代に放送された 342 曲中、現時点で実に 276 曲の映像が見つかっていない。「発掘プロジェクト」が 2021 年末でいったん全体募集を終了することを考えると、今後、発掘される可能性も低いと言える。

この中には、《大きな古時計》や《線路はつづくよどこまでも》、《赤鼻のトナカイ》など、当時の「みんなのうた」で放送されたことによって知名度を得て、現在の児童音楽においても主要なレパートリーとなっている楽曲も多く存在している。すなわち、戦後の日本の児童音楽文化を形成する楽曲群の、最初に日本で普及した時の姿がわかっていないのである。本研究ノートにおいては、このうちの《大きな古時計》に焦点を当て、その映像を再現する試みについて記したい。

《大きな古時計》は、米国のヘンリー・クレイ・ワークが作詞作曲したポピュラーソングで、1876 年に発表された。米国でもヒットしたこの楽曲は、1940 年に初めて日本で紹介されたが、その時は必ずしも定着に至るほどの反響を呼んではいない。《大きな古時計》が日本全国に広まったのは、やはり 1962 年 6-7 月に NHK「みんなのうた」で放送されてからになる。この時の訳詩を担当したのは、放送作家の保富康午氏であり、この訳詩による《大きな古時計》は、1966 年に初めて小学校音楽科教科書に掲載されてから現在に至るまで、教育・保育現場において使用され続けている。

その後の日本における《大きな古時計》の動向としては、1972 年と 2002 年に版を変えて「みんなのうた」で放送されたことがあげられる。特に 2002 年は、歌手の平井堅氏が歌

唱を担当したことで、話題を呼んだ。また、 例えば 1990 年のアニメ映画『ちびまる子ちゃん』において、この曲は一種のテーマソングとして扱われた。このようなこともあり、今や《大きな古時計》は、日本人なら誰でも知っている楽曲、すなわち共通文化・国民文化として定着している。本年(2021 年)3 月 13 日に朝日新聞紙上で行われた読者アンケート「今こそ聴きたいみんなのうた」ランキングでは、《ちいさい秋みつけた》や《手のひらを太陽に》、《北風小僧の寒太郎》等の有名曲をおさえ、《大きな古時計》が一位に輝いた。

今や国民文化ともなった《大きな古時計》だが、前述のとおり最初に日本で普及した時の姿がわからないということになる。 水星社の「みんなのうた」楽譜に、放送映像の原画が数枚、掲載されてはいるものの、やはりこれだけでは、この楽曲がこれだけ普及に至った 1962 年版映像の魅力を分析することはできない。佐藤が「みんなのうた」研究を始めた際に一番困ったことは、やはりこの資料の少なさ、当時の映像が残っていないということであった。しかし幸運なことに、「みんなのうた」最初のチーフ・プロデューサーである故後藤田純生氏の遺した資料と出会い、そのご遺族より、資料を研究に使用するご許可を頂くことができた。この資料の中には、後藤田氏の直筆原稿や当時の番組台本等、一次的な史料が多く含まれているが、以下の形で《大きな古時計》原画写真が、番号入りで残されていた。

この資料を発見したのが、2018 年度末のことになる。ここに保管されている、谷内六郎氏による原画は、銀塩写真の形で 15 枚が存在しており、スキャンをしてみると大変高い画素数が得られたことから、その時点で映像再現のアイディアが浮かんだ。

今回、映像再現を依頼した富澤瑞夫氏とは、2018 年の GW に既に知己を得ており、2019 年度になってすぐ、資料発見の話と映像再現の依頼を行った。2019 年後半には、二人で 1962 年版《大きな古時計》放送時に後藤田氏の下でディレクターをされていた志村建世氏を訪ね、「映像再現のための研究会」を行った。以下の写真は、その時の様子である。

このような経緯で 15 枚の中から、実際に当時の放送で使用された 10 枚を選出し、富澤氏と参考映像についての協議などを行い、内容が固まっていった。こうして富澤氏が編集を行った再現映像は、まるで本物と見紛うばかりの出来であり、今後の「みんなのうた」研究への活用が大いに期待できるものである。本研究ノートはこの映像再現についての記録として、以下、富澤氏の執筆による再現映像制作の経緯をまとめたノートを記載したい。

１．みんなのうた《大きな古時計》について

１）放送バージョン

NHK「みんなのうた」は 60 年間で約 1500 曲を世に送り出してきた。その中でも《大きな古時計》は世代を超えた人気曲である。これまで 3 つのバージョンが放送されている。原点である 1962 版の映像は失われてすでにない。

表１　《大きな古時計》　みんなのうた　放送バージョン

	1962 年版	1973 年版	2002 年版
歌唱者	立川澄人	立川清登	平井堅
映像作者	谷内六郎	竹口義之	亀田誠治
映像制作	画	ｱﾆﾒｰｼｮﾝ	ｱﾆﾒｰｼｮﾝ
現状	消失	残存	残存

「NHK みんなのうた」サイトよりまとめ

音源や映像の発掘について

2011 年の 50 周年を記念して「みんなのうた」サイトが NHK の手で作られ。過去放送の曲についてのデータが開示されるようになった。

これに伴い、発掘プロジェクトによる視聴者からの音源、映像探しが始まった。10 年たった 2021 年 5 月現在の結果は表 2 である。

1960 年代に家庭に普及したオーディオ録音と違い、映像の家庭記録普及は後年代であったことも有り、10 年間で発見された映像は多くない。特に 1960 年代前半では 1963 年の 1 作品でしかない。発掘状況も落ち着いたのか、この発掘プロジェクトも 2021 年の年末を持って終了が予定されている。

初期作品の発見は難しいだけに映像再現も意味を持つことが判る。

表２「みんなのうた」映像発掘、音源発掘の状況（再放送を除く）

	放送作品数	発見映像	発見音源	未映像	未音源
1961 年度	38	0	20	29	9

1962 年度	43	0	35	36	0
1963 年度	43	1	35	39	4
1964 年度	42	0	22	37	14
1965 年度	42	0	21	37	15
1966 年度	36	2	16	27	9
1967 年度	36	1	11	27	6
1968 年度	36	2	11	30	4
1969 年度	36	10	7	17	2
合計	352	16	178	279	63

「NHK みんなのうた」　サイトより集計分析　再放送分を除く　2021 年 5 月末現在

発見映像、発見音源：サイトで「発見」と表示される曲数

未映像、未音源：サイトで「探している」と表示される曲数

年度：その年および翌年の 3 月末まで放送されたもの。番組は 4 月放送開始。

放送時期により、放送パターンが異なり、リリース曲数は異なる

２）《大きな古時計》1962 年版の放送状況

「NHK クロニクル」サイト創設で、放送台本をもとにした過去の放送データ公開されるようになった。これによると《大きな古時計》1962 年版は 1962 年 6，7 月の「みんなのうた」、月曜日の歌として、9 回放送されたことが判る。富澤は当時、小学校 2 年生でこの放送を何回か聴取した。1962 年 7 月下旬夏休みに入ると、長野県松本市から東京都港区へ転居したため、両方の地で視聴することとなり、番組放送のことが記憶に残っている。

写真 1 はその当時の富澤と、視聴していたテレビ受像機である。

写真：1962 年　（長野県松本、東京港区）で
当時実際に放送を見たテレビと富澤（小学 2 年）

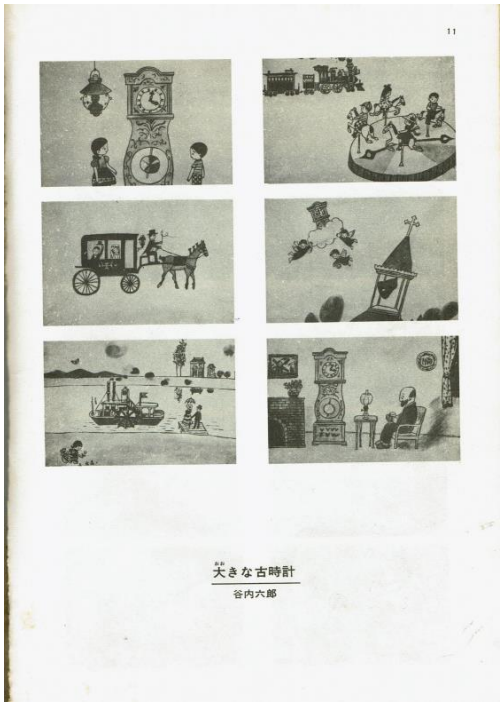
３）従来資料

放送映像の写真は水星社の「みんなのうた」楽譜集に掲載されている。《大きな古時計》では楽譜集 2 に谷内六郎氏のイラストとして 6 点が掲載されている。

富澤は放送の 3 年後の 1965 年からこの楽譜を所持している。その後入手した楽譜集 2 も 2 冊あるが掲載画には変化はなかった。

この楽譜集には発行年度の記載がないが、楽譜集として取得した JASRAC 番号で記載されているのでおおよそ発行年が類推できる。

掲載は実際の放送映像の一部であり、使用された映像は掲載画以外にもあったことを楽譜入手した 1965 年当時より認識していた。



写真：水星社　楽譜（1965 年頃のもの）

４）2011 年の映像再現

2006 年、60 年代研究サイト「60 年代　懐かしの宝箱」を立ち上げるとともに「懐かしのみんなのうた」ページを作った。それが縁で NHK のみんなのうた 50 周年記念の番組「熱中スタジアム」に出演、番組では放送はしなかったが谷内氏のイラストをもとに模型を作りこれを撮影してムービーを作った。これは限られた掲載された情景だけであったので歌詞全編を通しての映像再現としては十分なものでなかった。

60 年代研究サイト「60 年代　懐かしの宝箱」　「懐かしのみんなのうた」ページ

http://mtomisan.my.coocan.jp/page064.html

NHKBS 熱中スタジアム　2011 年出演時再現のために模型を作った

２．新資料の発見

１）イラストの発見と映像再現

「みんなのうた」最初のプロデューサーである後藤田純生氏の遺品より《大きな古時計》で使用したイラスト写真が 15 点あまりが見つかり、2019 年 5 月、佐藤慶治先生主催の研究会を通じ発見を知り、この写真を利用した映像再現させていただくことになった。

２）研究会での情報入手

1962 年当時番組制作を担当した志村建世氏を訪問しての当時の制作について聴きとりを行った。志村建世氏（当時の番組制作ディレクター）の証言は以下であった

《大きな古時計》の放送映像は、

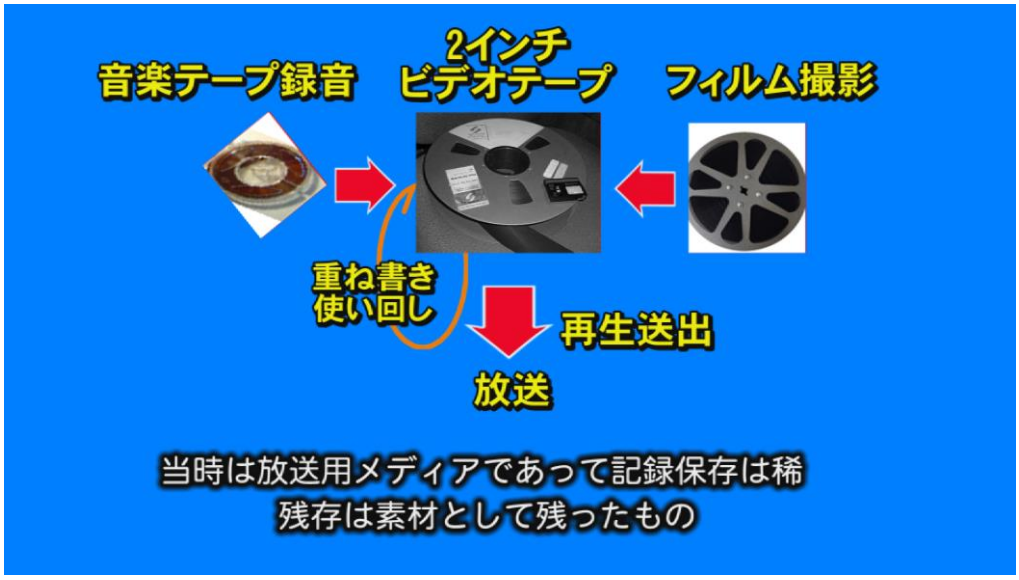
・谷内六郎氏が描いた 10 枚ほどのイラストを、スタジオのカメラで撮影した。

・パンやズームも使い、ゆったりした流れで構成した。

３）当時の放送方法

志村氏の証言によれば、放送には 2 インチビデオテープを使い音楽テープ録音とフィルム撮影をこのテープ上に録画録音して、それを再生して放送していたという。みんなのうたでは、映像と音楽それぞれ別に制作されたものが組み合わされた。この制作放送の仕組みもこの方法で構成できる。

この 2 インチビデオテープは重ね書き使い回された。テープが高価で希少で有ったこともあるが、再生送出用のメディアという考え方がまずあったと思われる。現在のようなマスターテープを保存する、アーカイブと言った考え方はまだ無かったと志村氏も語っている。素材としての音、映像がそれぞれあれば、一体化は必要な時に当時は出来た訳である。



４）1962 年音源について

歌唱者の立川澄人氏は 1960 年代後半、芸名を「清登（読み方は“すみと”のまま）」に改名した。従って年代で歌唱者の名前が異なるが、改名のためで同一人物の歌唱である。

志村氏が所有した 1962 年の音源を今回の再現で利用した。この機会に DVD 音源（1973 年版）と比較したが若干の速度偏差はあるが基本的に同じ音源であることが判った。1973 年の放送では映像だけが作り変えられたことになる。1962 年から 10 年以上も経過しておりすでにカラー放送の時代でもあった。

なお、1962 年と 1973 年が同音源であれば、歌詞タイミングも同じであっても問題なく、1962 年の再現での歌詞入れでは 1973 年のタイミングが参考にすることができた。

３．再現作業

１）映像再現のための写真検討

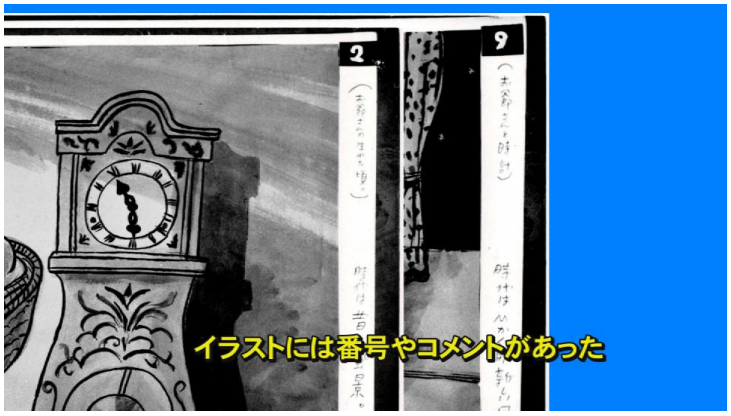
写真によるとイラストには右隅に番号やコメントの付記があった。ここは水星社に掲載されたものとは異なるところである。番号は管理上だけでなく、進行に従ったものと考えるのもいくつかの画と歌詞の対比から自然と思われた。しかし、歌詞そのものイラストばかりでもないので完全に番号順に単純使用するというのもやはり無理がある。

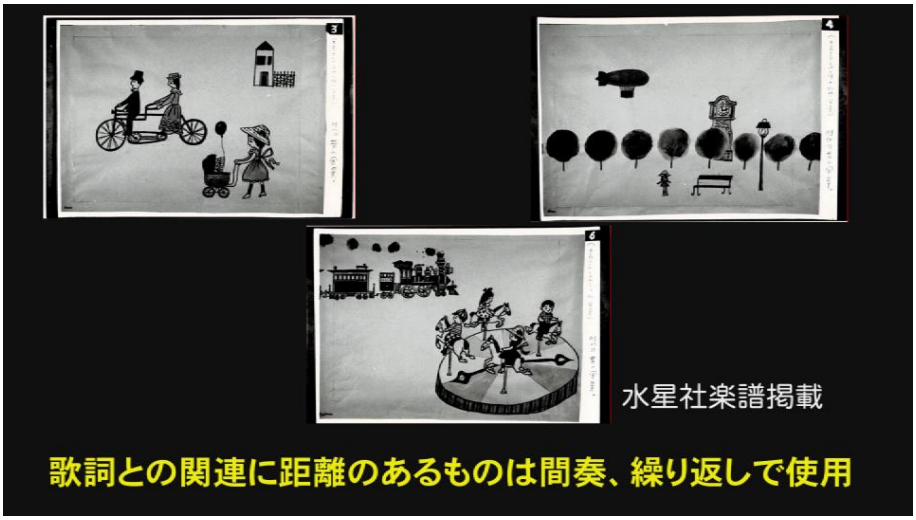
コメントは使用の具体方法を書いたものと、絵が想定しているものがあった。
絵の想定は具体的なものは少なく、現在や過去と言った概略の時期や、イメージと抽象的なものが多かった。　以上まとめたものが表 4 になる。

２）イラストの採用不採用の検討

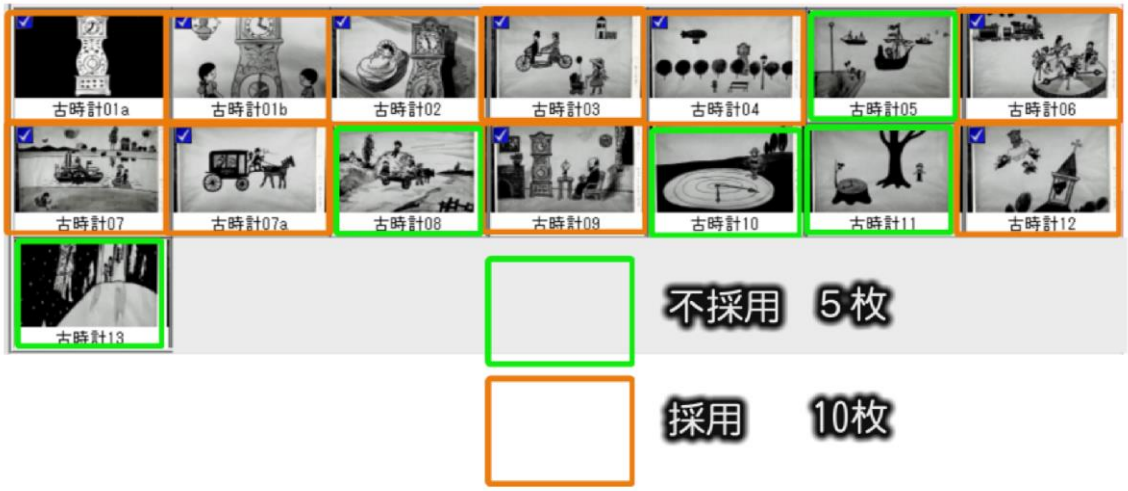
志村氏は 10 枚程度を使用したと言っており、発見されたイラストは 5 枚ほど多い。曲は 2 分少しと短く、歌詞のくりかえしもある。1 枚あたりの使用時間も短く、そのイラストを理解、意味理解するのに時間がかかるようでは曲の進行にはとてもついて行けない。

曲の歌詞との関連付けが直接的なものは良いが、曲との関連付けが難しいイラストは使用しないことで枚数を減らした。歌詞との関連に距離のあるものは間奏や歌詞の繰り返しで使用した。




水星社楽譜掲載
歌詞との関連に距離のあるものは間奏、繰り返しで使用

曲との関連付けが難しいイラストは使用しなかった


古時計01a
古時計01b
古時計02
古時計03
古時計04
古時計05
古時計06
古時計07
古時計07a
古時計08
古時計09
古時計10
古時計11
古時計12
古時計13
不採用　5枚
採用　10枚

番号	キャプション	キャプション	水星社	再現
なし	なし（黒バックの時計、停止）	なし		●
なし	なし（子供と時計、動作）	なし	●	●
2	お爺さんの生まれた頃	時代は昔の風景		●
3	お爺さんの子供の頃の風景	時代は**昔の風景**		●
4	お爺さんの子供の頃の幻想風景	時代は昔の風景		●
5	お爺さんの子供の頃の幻想風景	時代は昔の風景		不使用
6	お爺さんのノスタルジー的風景	時代は昔の風景	●	●
7	お爺さんの結婚の日	時代は昔の風景	●	●
7	７に続く（お爺さんの結婚の頃）	時代は昔の風景	●	●
8	お爺さんと孫	時代はひかく的新しい風景		不使用
9	お爺さんと時計	時代はひかく的新しい風景	●	●
１０	孫たちの時計への	今の風景		不使用
１１	孫の時計のイメージ	新しい風景		不使用
１２	お爺さんの昇天	時代はひかく的新しい風景	●	●
１３	お爺さんと時計への回想イメージ	最後のオシマイは１の絵を出す		不使用

表４　発見イラストの概要

３）映像づくりの検討

「みんなのうた」の映像には、歌の内容にちなんだ風景などの実写、シルエット、　アニメーション、イラスト、人形の操演、スチル写真などがあって、放送年度でバランス構成は異なっている。表５が集計で、イラストからの映像は「絵」の項目である。

《大きな古時計》で採用されているイラスト利用は60年代を通して映像表現で利用されている。イラストをカメラ撮影で動きを付けることは志村氏の証言にある。

イラストに動きを付けずに放送に映し出すことは60年代初期にも、午後～夕方の放送休止、突然の放送中断時などはあったが当時も印象良いものではなかった。正規放送では静止画ではなく動画を送り出すというのは当時でも基本必要であったと考えられる。

「みんなのうた」の映像ではイラストにカメラ撮影で動きを付けることは当時どんな表現として行われていたか、今日知られるような手法が使用されていたかなどが映像の具体再現する上では重要となる。

表５　みんなのうた映像の構成　（NHK「みんなのうた」サイトよりカウント）

	作品数	残存	実写	ｼﾙｴｯﾄ	ｱﾆﾒｰｼｮﾝ	絵	人形	ｽﾁﾙ	不明
1961年度	38	9	12	12	12	4	0	0	0
1962年度	43	7	17	5	13	3	2	1	0

1963 年度	43	4	20	3	11	1	2	0	4
1964 年度	42	5	16	4	18	0	1	0	2
1965 年度	42	4	16	8	15	2	0	0	0
1966 年度	36	9	16	1	15	3	1	0	0
1967 年度	36	8	14	3	13	2	1	0	3
1968 年度	36	4	15	2	20	0	0	1	0
1969 年度	36	17	14	1	14	9	1	0	0
合計	352	67	140	39	131	24	8	2	9

４）当時の映像表現調査

現在、残存するみんなのうた映像で、イラストを使った曲の映像演出を分析し参考にすることにした。《大きな古時計》現在残る当時の映像としては以下があった。

a）雨の遊園地

うた中尾ミエ作詞谷内六郎 映像絵：谷内六郎

初回放送月 1963 年 2 月 3 月

＜映像出典＞NHK 総合「懐かしのみんなのうた」

2003 年 8 月 3 日放送から

b）「オカリナの丘」

うた中尾ミエ作詞保富康午　映像絵：東君平

初回放送月 1963 年 8 月 9 月放送

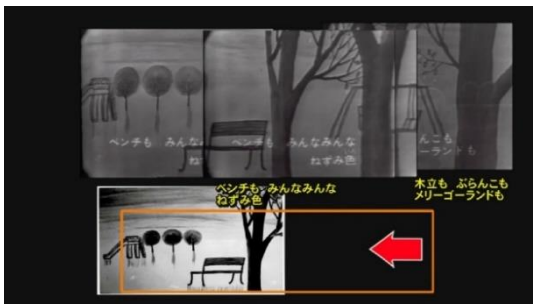
＜映像出典＞NHK「みんなのうた」

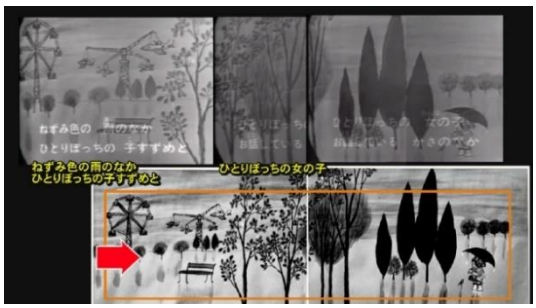
DVD 第 2 集（2004 年）から

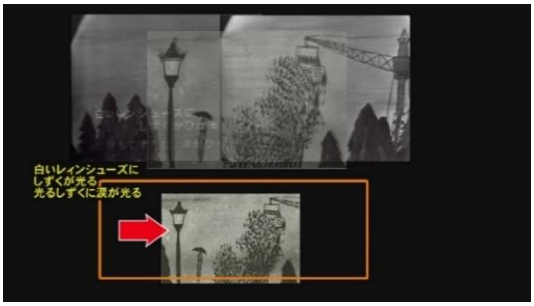
映像制作手法の分析

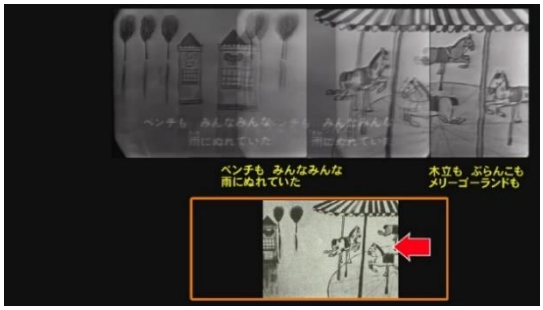
「雨の遊園地」での具体手法

テロップ送出で当時使ったロールマシンにイラストを巻き付けて横にパンニングして撮影している。また、カメラを使ったズームを行っている。









前後は歌唱実写で挟まれる

1）イラストの枚数は５枚　使用は全編 2 分 10 秒のうち 1 分 40 秒

2）終始全てに動きが付けられて画の一部を左または右から舐めるパンニング映像、
画像のゆがみから判るのは、カメラを動かすのではなく絵をドラムに巻いて回転させ（テロップ用のロールマシン）スクロール効果を得ている＊１
横長の絵の必要性があって２枚絵を繋いでいる

3）１か所だけカメラ移動のパン＆ズームがされている＊２

4）絵と絵の切り替えは非常に短いオーバーラップが使われている

5）テレビ映像では歌詞にかなり忠実な内容出し方がされおり、それに叶う作画がされている。＊３

6）水星社画像より原画は横長の絵で、水星社画像は部分でテレビ放送風に１シーン的切り取りをして見せた感じである

7）冒頭１枚目の絵は楽譜集にはない、他４枚の順は入れ替わったところが有る。楽譜集 2 つ目の画像の回転木馬は後の方の番号が付いている

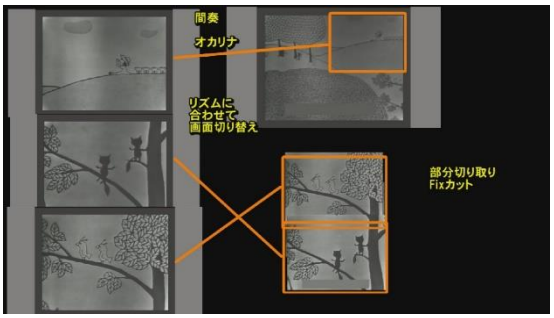
＊１　カメラ操作の都合でパンでは焦点送り滑らかな映像が難しかったと考えられる

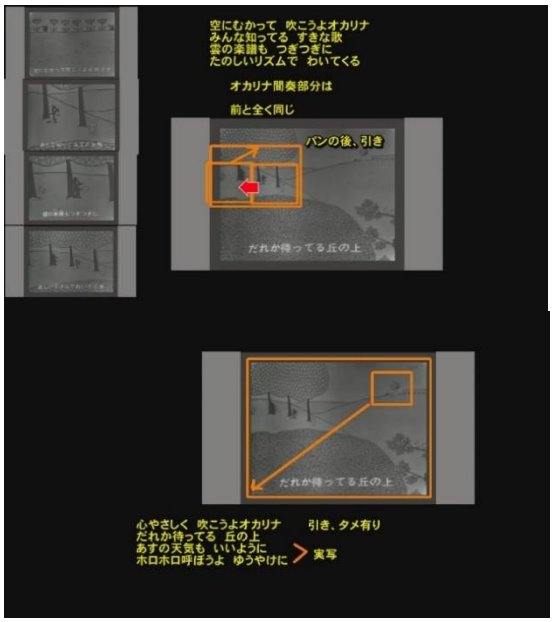
＊２　当時のカメラの機構からは寄りによるものと思われる

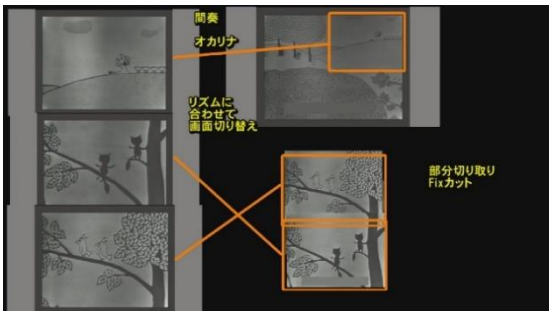
＊３　等速のロールで描画順に現れるので作画時から歌詞を意識したと見るのが妥当
この曲の作詞は谷内六郎氏自身であるので内容は十分承知していたはずである。

「オカリナの丘」での具体手法

１つのイラストでフレーミングを工夫してストーリーを作り、歌詞タイミングやリズムに合わせたパンニングやズームを豊富に行っている。場面切替えにオーバーラップを使う。







使用イラストは３枚　ミュージックビデオの基本・常識とする絵作り、定番カメラワーク

前後に実写が有り、絵により表現は１分 25 秒

・チルトやパンなど基本的カメラワークを使用

・１つの絵から部分出し、１つの絵をなめる、引くなどして絵作り

・歌詞に合わせた画面づくり

・リズムに合わせた画面切り替え

・音楽くりかえしに合わせた画面作り

映像再現制作の手法

以上の２作品の分析から

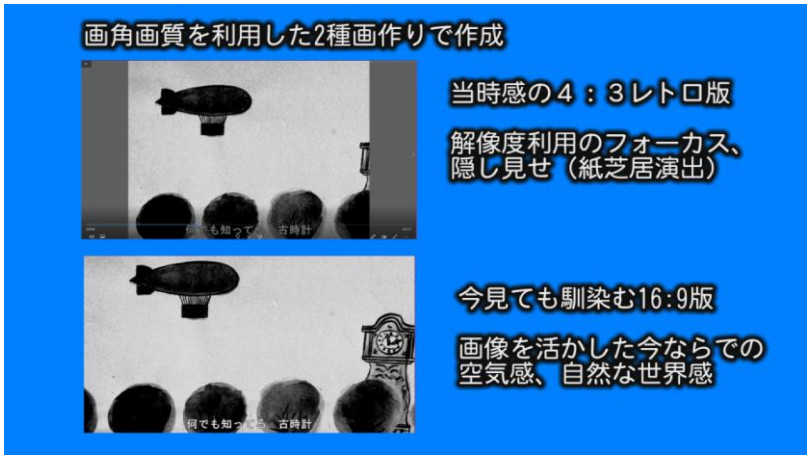
イラスト１枚を丸写しにするのではなく、

１）部分をアップして使う、アップする部分を動かし使う、寄ったり引いたりで動きを付ける。
２）ズームアップする場所などは歌詞や進行に合わせる。
３）切り替えは歌詞の変り目に合わせ、オーバーラップを使い切り替わりを滑らかにする。

なお、イラスト写真をカメラで撮影するのではなく編集ソフトの機能を利用する。
実際に利用したのは、編集ソフトで部分アップや動きを付ける「モーション」という効果で、上手なカメラマンが使う「溜め」などを自動で付加する機能も利用した。
歌詞テロップは歌い易さを考慮やや早めに表示している。1973 年版のタイミングを参考にした。

再現の試行と映像のまとめ
曲を流しながら、歌詞の言葉の出て来るタイミングに合わせイラストの部分が映し出されるように調整した。
4：3 版、16：9 版、画角と画質を利用した 2 種で作成した。作成して見比べると、当時感のある 4：3 版はレトロで親しみが感じられる。また解像度の下げての利用でソフトフォーカスなやさしさも出る。特に画角の狭さを利用した隠し見せは昔懐かしい紙芝居的演出で、歌詞との連携も良い。現在見ても馴染むのが 16:9 版である。画像を活かした今ならでの空気感、自然な世界感がある。ハイビジョンが一般化して約 10 年、画角・画質とも視聴者の基本になったということもあろう。
画質面で 4：3 版はレトロな感じに仕上がったので、これを上映発表する。

映像制作の仕組みは、発見された写真をスキャナでデジタルデータとして、編集ソフトに取り込み、編集ソフトの効果を使って、カメラで撮影したような表現としている。この効果では、専門のカメラマンが作る微妙な「タメ」や、滑らかな変化を作り出す。また音を出しながらの編集操作が行えるので音源との同期を確認しながら映像制作調整が行えた。



（Roland 社　映像編集専用機 DV-7HD および パソコン用編集ソフト DV-7G）

再現を行って

当時の映像を分析し、当時の技術や表現も参考に《大きな古時計》の映像再現を行った。「みんなのうた」の特徴の 1 つである音楽と映像の組み合わせでは、今日ミュージックビデオとして知られる基本テクニックが当時すでに利用されていることが今回判明し、《大きな古時計》にも利用するところとなった。音楽の拍子や小節、繰り返しに合わせた映像の切り替えなどがそれである。

一方で今回の調査では、イラストからどう動画を作るかは作品ごとで違っており、制作者の意欲的な挑戦が感じられる。たとえば、《大きな古時計》より 1 年あとの「オカリナの丘」ではイラスト枚数が少ない。最初から 1 枚のイラストからいろいろなシーンを切り出せる仕込みが描かれている。十分制作方法を考慮し作画したのだろう。

逆に、《大きな古時計》がイラストを余らせたこととは対照的である。

「みんなのうた」で付けられる映像が人気であったことは NHK の番組ガイドであった「グラフ NHK」等の記事の記載にも観られる。表 5 のように映像の構成には、イラスト以外にもあってそのバラエティと映像技術表現の駆使が人気に繋がったと思われる。しかしそうした分析を細かく行う視点からも失われた映像が多いことは大変残念である。

今回は原画写真発見でできた再現であるが、関連資料・記憶・証言なども今だからできるということもある。世代を越え、直接の感性につながることができる「みんなのうた」の発掘研究はこの 60 周年で終わることなく続くことを願いたい。

当時を懐かしくしのぶだけでなく、今新たに感ずることで確認できることもあるように思う。再現された実体をベースに論議もできるし、当時を知るだけでなく、当時の方からの意見が聴取できるそれは確証にもなり、もし異論があるなら新たな情報でもある。過去映像発見が困難なら、再現という形で得られる情報でもある。

［Attempt to Reproduce Lost Video—"My Grandfather's Clock (1962)" in NHK's "Minna-no-uta"—］

［TOMISAWA, Mizuo・トート音楽院講師・映像研究
SATO, Keiji・鹿児島女子短期大学専任講師・音楽教育研究］